

実践報告

異文化対応力測定尺度の試験的運用による短期語学留学の
効果検証（長崎大学における試み）古村 由美子^A、工藤 俊郎^B、青柳 達也^C、小野 博^D、
佐々木 有紀^E、新田 よしみ^FThe Effect of the Short-term Study Abroad Program
Verified by Developing Measurement Scales for
Intercultural Communicative Competence
(A Pilot Study at Nagasaki University)Yumiko FURUMURA^A, Toshio KUDO^B, Tatsuya AOYAGI^C,
Hiroshi ONO^D, Yuki SASAKI^E, Yoshimi NITTA^F

Abstract: This study aims to explore the effects of the short-term study abroad program on promoting intercultural communicative competence (hereafter ICC). Students' development of ICC was analyzed by pre and post-departure surveys, which have been produced by authors in this study. Twenty-five undergraduate students at Nagasaki University participated in this study. A factor analysis was performed, and then five factor items were extracted out of 48 questions. Through the analysis of variance, significant differences appeared in four factors out of five between the results of pre and post-departure surveys, which suggests that the short-term study abroad supported by the university would be effective to promote some of students' ICC.

Keywords: short-term study abroad, intercultural communicative competence, assessment, statistical analysis

キーワード：短期留学、異文化対応力、測定、統計分析

1 研究の背景

現在のグローバル化の状況下において、日本においても多様な異文化的背景を持つ人々や組織に適切に対応できる人材の育成が喫緊の課題となり、多くの大学や教育機関にて留学などの海外派遣事業が盛んに実施されてきた。グローバル人材育成推進会議(2011)¹⁾がグローバル人材の概念の最初にあげているのが「語学力」(主に英語力)である。よって、多くの大学や教育機関は、実施した海外派遣事業の成果を測定するために、TOEFL や TOEIC などを使用して英語力の変化に焦点をあてることが主流となっている。

しかしながら、異なる考え方や価値観などが原因となって発生する問題は語学力があるから解決できる、というわけではない。何故なら、同じ母語を話す人々の間においても、異なる価値観などから発生する同様の問題を簡単には解決できず、世界の様々な場所で大きな社会問題が起こっているからである。

英語ができることが条件ではなく「英語を深く学ぶことは、グローバル人材を育てる上できわめて有効な手段である」と勝又(2017)²⁾は述べている。筆者らはグローバル人材の育成には、英語力に加え、コミュニケーション能力と異文化対応力が必要であると考えている。異文化対応力に関しては、その育成方法、並びに測定方法の開発や普及が重要であると考え、異文化対応力の測定を行うテスト開発を行っている。本稿で言及している「異文化対応力」は、日本語では「異文化間コミュニケーション力」や「相互文化コミュニケー

A: 長崎大学言語教育研究センター

B: 大阪体育大学体育学部

C: 佐賀女子短期大学

D: 西九州大学

E: 福岡大学国際センター

F: 福岡大学国際センター

ション力」等とも呼称されており、英語では‘Intercultural communicative competence (以降 ICC)’と呼ばれている。この「異文化対応力」の定義については様々な議論がなされている。八代他(2009, p.30)³⁾は、望ましい異文化コミュニケーションについて「自分と相手の共生共栄と相互尊重のために行う情報交換、情報共有、共通の意味形成行為」と定義している。八島(2004)⁴⁾は「違った文化で文化化(社会化)を経た人との出会いでは、違和感や齟齬が起りやすくなるものである」と述べ、これまでに北米を中心に研究されてきた異文化対応力や異文化間能力の定義を「異文化接触でおこりうる対人関係の違和感や齟齬を調整し、異文化の人との出会いを両者にとって実りのあるものにする能力、未知の環境で自己制御しうまく機能できる個人の能力」と定義している。1970年代より ICC の構成要素について様々な研究者が論じてきたが(八島, 2004)⁴⁾、最終的に多くの研究者によって同意された構成要素について結論はでていない。

異文化対応力の測定を試みるアセスメントは、特にアメリカを中心に多く存在する。具体例のいくつかとしては、Global Perspectives Inventory (GPI)、Intercultural Development Inventory (IDI)、The Global Competencies Inventory (GCI)、Global Competence Aptitude Assessment (GCAA)、The Intercultural Readiness Check (IRC)、BEVI (Beliefs, Events and Value Inventory)などがある(工藤・青柳, 2019)⁵⁾。これらは、それぞれ論理基盤をもとに実践を重ねデータを蓄積している。分析と研究を重ね文献としてまとめた成果をもって妥当性を主張している。日本語に翻訳され、国内で実施された事例も存在する。アセスメントの対象は主に、企業、教育、団体に分けられるが、対象に応じて区別をしていないアセスメントもある。しかしながら、社会人と学生が求める異文化対応力アセスメントの内容は同じであるとはいえない。また、英語で作られたものを日本語に翻訳しているものにおける設問においては、全くもって日本人の学生へ適していない設問が存在することもある。これらのアセスメントが作られたアメリカは、多文化共生社会が早くから存在していた環境であるが、古くから島国として単一的な文化に重きを置かれた日本とでは、その環境にかなりの差があると考えられる。

このような状況を鑑み、著者らは日本人学生の傾向に適した、異文化対応力測定方法の開発を2017年6月から進めており、その測定方法では、上記で述べた八島(2004)²⁾による異文化対応力の定義を採用した。さ

らにByram (1997, 2008)^{6) 7)}のICCの5つの構成要素である、「態度」「知識」「解釈と関連づけのスキル」「発見と相互交流のスキル」「批判的な文化意識/政治教育」が多く理論を総括していると考え、それらを基盤として、異文化対応力測定尺度による2018年度版質問紙を作成した⁸⁾(古村, 2018)⁹⁾。質問文作成にあたって、Byramの構成要素は抽象的に表現された記述が多いため、そのまま質問文とすることは適切ではないと判断し、難しい語句ではなく、簡易的でイメージしやすい具体的な言葉を使用して、どのように行動するかを問う質問文を多くするよう工夫をした。

短期、長期に関わらず留学体験を通じて異文化対応力が発達したのか否かについては、学生の主観的評価に基づく報告書を分析した研究がある(黒崎, 2013; 大津・佐竹, 2016)^{9) 10)}。しかしながら、異文化対応力の客観的測定は難しいと結論付けている研究もある(大津・佐竹, 2016)¹⁰⁾。本稿で使用した質問紙においても、学生本人が自己評価をするが、できるだけ客観的な事実に基づいて評価判断する項目へと改訂した。

本稿では、長崎大学が2018年夏季に実施した短期語学留学の成果を測定するために、著者らが作成した異文化対応力測定尺度(2018年度版)を用いた質問紙を使用した。さらに大学への報告のために毎年使用している学生の留学後の感想アンケートも使用した。学生の留学前と後の異文化対応力の変化について説明するためには異文化対応力測定尺度を主に使用し、変化が生じた場合、その原因について留学前と留学中のプログラム内容に照らし合わせて検討し、現行のプログラム内容を省察する。その際に学生の感想アンケートで得た結果も必要に応じて、副次的に参照した。

2 短期語学留学の概要

2.1 派遣大学と実施プログラム

調査対象はアメリカ合衆国デラウェア州にあるデラウェア大学付属 English Language Institute にて3週間の英語授業を受講するプログラムである。筆者はホスト校とのプログラム内容交渉(授業外活動等)、事前オリエンテーション実施、引率、報告会実施、成績評定といった、プログラム一連の担当者として本プログラムに関わった。調査対象とした2018年度プログラムは前年度に引き続き、2回目の実施となる。2017年度1回目には19名が参加し、2018年度には26名が参加した。本プログラムには日本学生支援機構による、

海外留学支援制度奨学金が付与されており、基準を満たす学生は経済的支援（返済不要）を得ることができる。

当ホスト校ではアメリカの大学入学を目的として、様々な国から渡米した留学生（2018年にはサウジアラビアと中国からの留学生が最多）がレベルに応じたクラスで英語を学んでいる。長崎大学の学生は初日にブレイスメントテストによってレベル判定され、各自のレベルに応じたクラスへ別々に編入される。クラスによって日本人学生数の割合は異なるが、総じて少数である。英語授業では多様な文化背景を持つ学生と一緒に学習するため、アメリカ以外の文化についても直に学ぶことができる。

参加生は午前中に英語授業を受講し、午後には多様な活動が予定されている。その一つとして、デラウェア大学にて日本語を学んでいる現地学生によって運営されている Nihongo Table というサークル活動への参加が挙げられる。この活動により、現地学生と毎週ある一定の時間、ことができる。彼らの日本語運用力のレベルは多様であり、必ずしも日本語で効果的に交流できるとは限らないため、日本語と英語を使用して交流している。

これ以外のサークルにも参加することが許されており、自分の好みに応じてスポーツサークルなどに参加する学生もいる。このような積極的な活動を通して、現地学生との友情を深めている学生も見られる。

本プログラム参加生全員がキャンパス近郊に居住するホストファミリー宅へ滞在し、アメリカの家庭での生活を体験する。

2.2 英語授業以外の必修課題

本プログラムは、一定の基準を達成すれば教養英語授業の単位(1単位)として読み替えられ、全学部が長崎大学での単位を取得することができる。以下に単位取得のために必要な課題について説明する。

2.2.1 現地でのプレゼンテーション

デラウェア大学では日本語授業が行なわれており、日本文化に興味を持っている学生がいるため、長崎大学の参加生は日本文化について、英語でグループプレゼンテーションを行い、現地の学生からの質問を受け互いに自由に日本文化について語りあう。

出発する前に各グループで自由にトピックを決め、

自分達でプレゼンテーションを構成し練習をする。出発前のオリエンテーションでは、英語プレゼンテーションの基本について指導するが、それ以降は自分達で準備をする。

2.2.2 デラウェア大学の学生へのインタビュー

積極的な学生は自分から現地の学生へ話しかけることができるが、自発的に会話をするきっかけをつくるのが苦手な学生もいる。しかしながら、現地の学生へのインタビューを課題とすることにより、見知らぬ現地学生へ話しかけることが必須となり、「課題なので質問してもいいですか？」と英語でお願いして、話すきっかけをつかむことができる。

トピックは、1) 長崎大学で自分が学んでいること、2) 長崎大学の特色と授業形態について説明した後、デラウェア大学の学生に対して下記について質問する。3) デラウェア大学で学んでいること、4) デラウェア大学の特色と授業形態、それについての感想、5) 上記以外で自分が尋ねたいことを自由に選ぶ。

相手の許可を得てこの会話を録音し、話した内容をレポートとして報告する。参加生の英語力は異なっているため、このレポートは英語でも日本語でもよいことにし、まずは会話すること自体に焦点をあてて、相手の言っていることを理解しながら、個人的な相互交流を楽しむことが重要であると説明している。

2.2.3 帰国後の報告会

帰国後には、アメリカで英語を学んだ成果として、様々な異文化体験について英語でのグループプレゼンテーションを行う。本留学プログラムで最も印象に残っていることをトピックとして選び、授業、ホームステイ、ニューヨーク・ワシントン DC への日帰り旅行、現地学生との交流など、各自が好きなトピックを選び帰国後、長崎大学にて英語でグループ毎に報告を行なう。

3 研究方法

3.1 研究目的

目的 1) 本短期留学参加生の異文化対応力をプログラム参加前と後に測定し、比較する。

目的 2) 変化がある場合、またはない場合にもその理由を探り、プログラム内容と関連づけ、今後のプログラムへの展望について考察する。

3.2 実施手続き

2018年度夏季英語短期語学留学プログラム(米国デラウェア大学)に参加した学生26名の内25名の回答が有効であった。参加生の所属学部は、医学、歯学、薬学、工学、水産、環境、経済であり、内訳は学部1年生11名(男子7名、女子4名)と2年生14名(男子7名、女子7名)であった。調査対象である学生へ調査の目的を説明し、彼らの回答内容を本稿に匿名で使用することにに対して全員から承諾を得た。

3.3 本稿で利用したデータ収集方法

3.3.1 異文化対応力測定尺度による質問紙と因子分析(2018年度版)

Byram (1997, 2008) ^{6) 7)} による Intercultural Communicative Competence の要素を基本として、48項目からなる2018年度版異文化対応力測定質問紙を作成した。出発する直前のオリエンテーション時と帰国後報告会時に回答を得た。1から4までの4件法(1「全く知らない」、2「少し知っている」、3「ある程度知っている」、4「よく知っている」)にて回答を得た。質問紙には、「知っていますか?」という質問項目以外にも「～したことがありますか?」、「～できましたか?」等、実際の行動について尋ねる項目も含んでおり、これらの項目についても4件法にて回答を得た。

本質問紙は、2018年度内に5大学、1高等専門学校によって使用され、350名の回答のうち有効な345名分の回答に対して因子分析を行い、全27項目からなる因子を抽出した⁸⁾。本因子分析では、48の質問項目のうち、「はい」「いいえ」で回答を求める9項目を除く39の質問項目の回答を対象とし、最尤法によるプロマックス回転(斜行回転)を用いた。初めの分析を見て、固有値、分散説明率および扱いやすさの観点から因子数を5に固定し、分析を合計9回行った。

因子分析の繰り返しは、共通性が0.3以下程度を除外することを目安としながら、因子負荷量、各因子に含まれる項目数を考慮して全体の説明力が上がるように繰り返した結果、39項目から12項目が削除され、最終的に27項目からなる5因子構造が見いだされた。

15項目からなる第1因子は変動全体の35.3%の説明力を有し、3項目からなる第2因子は6.3%、4項目からなる第3因子は6.4%、3項目からなる第4因子は5.0%、2項目からなる第5因子は3.1%で、第5因子まで合わせた説明力は変動全体の56.2%であった⁹⁾。

また、5因子の各項目内容、 α 係数、因子負荷量、因子相関は表1のとおりである。各因子間には、それぞれ0.3から0.6程度の弱い、または中程度の相関があることがわかった。

表1 因子パターン

	質問項目内容	第1 因子 F1	第2 因子 F2	第3 因子 F3	第4 因子 F4	第5 因子 F5	共通 性	平均	N
第1因子($\alpha=.93$) F1 交流: 交流の態度、相手国の人々との交流・意思疎通への関心									
Q37	留学する予定の国出身の人と交流したことがありますか。	.968	-.122	-.090	-.075	-.106	0.616	2.51	345
Q38	(37「留学する予定の国出身の人と交流したことがありますか」で「少しできた」「ある程度できた」「できた」と答えた人のみ) 交流した際に、その国・地域と文化について知っていることをうまく利用することができましたか。	.897	-.130	-.037	-.031	.004	0.656	1.98	345
Q1	SNS やメール等で時々連絡を取り合う外国人の友人はいますか。	.680	-.037	-.148	.150	-.066	0.422	1.83	345
Q40	留学(訪問)する予定の国・地域で、人々と親しくなるために役立つ場所やサービスを調べて確認したことがありますか。	.656	-.024	.011	.074	-.041	0.439	1.98	345
Q41	(40「留学(訪問)する予定の国・地域で、人々と親しくなるために役立つ場所やサービスを調べて確認したことがありますか」で「一度ある」「数回ある」「頻繁にある」のどれかを回答した人のみ) その場所に行ったりサービスを使ってみたりしたことがありますか。	.631	-.072	-.003	.110	.042	0.463	1.75	345

	日本（自国）と対話相手の人の出身国との間の、過去から現在までの関係について調べたことがありますか。	.624	-.118	.230	.004	-.050	0.448	1.83	345
Q8	日本（自国）とこれから留学（訪問）する予定の国・地域が、これまでどのような関係にあったか、そして現在はどうな関係があるのかについて知っていますか。	.594	.064	.078	-.119	.079	0.451	2.08	345
Q36	留学（訪問）する予定の国・地域の特徴についてどれくらい知っていますか。	.583	.192	.029	-.052	.035	0.514	2.32	345
Q9	これから留学（訪問）する予定の国・地域のひとと親しくするにはどうすればよいか、また何かトラブルが生じた際にどうすればよいかについて知っていますか。	.563	.220	-.051	.015	-.029	0.447	2.07	345
Q23	これから留学（訪問）する予定の国・地域において一般的にどのようなコミュニケーション上の特徴があるのか知っていますか。	.550	.220	-.089	-.053	.200	0.605	2.07	345
Q12	これから留学（訪問）する予定の国・地域でこれまでに起こった出来事について知っており、また、日本人（自国の人々）がそれをどのように見ているのか、について知っていますか。	.521	.016	.040	.001	.198	0.483	1.89	345
Q5	個人的に連絡をとり、外国人と交流したり、活動したことがありますか。	.500	-.112	.025	.189	.003	0.331	1.82	345
Q14	留学（訪問）で滞在する国・地域の人々がどのように一般常識や習慣を身につけていくのかについて知っていますか。	.444	.109	-.089	-.060	.271	0.434	1.77	345
Q11	日本（自国）でこれまで起こった重要な出来事が、これから留学（訪問）する予定の国・地域にどう関係し、その国・地域の人々からはどのようにその出来事が見られているのかについて知っていますか。	.426	.040	.067	.003	.243	0.451	1.88	345
Q10	文化の異なる人々の間でどうして誤解が生じるのか、またその誤解が生じる原因について知っていますか。	.383	.291	.122	.048	-.031	0.446	2.27	345
第2因子($\alpha=.82$) F2 自国：自国の習慣に関する知識									
Q19	日本（自国）で生活する際に、自分たちの生活に大きな影響を与える社会のルールはどのようなものかについて知っていますか。	-.156	.914	-.007	.089	.045	0.801	2.24	345
Q20	（問19で「少し知っている、ある程度知っている、詳しく知っている」のどれかを回答した人のみ）そのルールは日本人（自国の人々）にどのように受け取られているのかについて知っていますか。	-.119	.799	.049	.000	.088	0.658	2.05	345
Q13	日本（自国）で人々がどのように一般常識や習慣を身につけていくのかについて知っていますか。	.140	.622	-.009	.021	-.160	0.394	2.47	345
第3因子($\alpha=.83$) F3 理知：異文化の出来事に対する理知的理解									
Q45	（自国での）その出来事について、根拠に基づき論理的に分析・評価したことがありますか。	-.202	-.048	.893	.027	.096	0.698	2.21	345
Q47	（訪問先での）その出来事について、根拠に基づき論理的に分析・評価したことがありますか。	.010	-.135	.781	.085	.132	0.663	1.92	345
Q44	日本（自国）で起こったニュースを見て、その出来事はどのような原因で起こったのか、考えたことがありますか。	.015	.220	.675	-.129	-.197	0.496	2.78	345
Q46	留学（訪問）する予定の国・地域や海外で起こったニュースを見て、その出来事はどのような原因で起こったのか考えたことがありますか。	.354	.070	.512	-.009	-.125	0.517	2.27	345

第4因子($\alpha=.86$) F4 スキル：意志疎通方法（スキル）に対する関心									
Q43	(42「日本人（自国の人々）と外国人が含まれるグループでディスカッションをしたことがありますか（授業内、授業外どちらでも）」で「一度ある」「数回ある」「頻繁にある」のどれかを回答した人のみ）その時に、自分が持っている知識やスキルを使って、結論がでるように導くことができましたか。	.006	.026	-.047	.954	.030	0.923	2.10	345
Q42	日本人（自国の人々）と外国人が含まれるグループでディスカッションをしたことがありますか（授業内、授業外どちらでも）。	.023	.071	-.031	.839	-.076	0.710	2.42	345
Q48	外国人とのディスカッションで、文化の違いを配慮して、参加者全員が納得できるような結論を導くことができましたか。	.112	.028	.134	.529	.043	0.485	1.93	345
第5因子($\alpha=.90$) F5 相手国：相手国の慣習・自国との関係についての知識									
Q22	(21で「少し知っている、ある程度知っている、詳しく知っている」のどれかを回答した人のみ）そのルールはその国の国民にどのように受け取られているのかについて知っていますか。	.055	-.077	.016	.013	.917	0.851	1.57	345
Q21	これから留学（訪問）する予定の国・地域で生活する際に、自分達の生活に大きな影響を与える社会のルールはどのようなものかについて知っていますか	.111	.058	-.027	-.032	.789	0.769	1.74	345
因子間相関		F1	.530	.454	.492	.646			
		F2	.530	.455	.389	.541			
		F3	.454	.455	.389	.325			
		F4	.492	.389	.389	.345			
		F5	.646	.541	.325	.345			

因子抽出法：最尤法、回転法：プロマックス法

長崎大学は上述した5大学の一つであり、短期語学留学による効果を測定するために本質問紙を用いた。本稿では、因子分析から得られた因子得点係数を用いて回答者の各因子における因子得点を算出し、その因子得点の変化に注目することにより、短期語学留学によって異文化対応力がどのように変化したかを測定した⁴⁾。

3.3.2 その他のデータ

(1) 学生の感想アンケート調査（9項目・5件法での回答と記述式回答）

質問項目は、研修全体、ホームステイ、授業、出発前オリエンテーション、研修の成果、よかった点、改善点、交流、文化や習慣の違い等についてであった。

(2) 派遣先大学での英語プレイスメントテスト成績

4 結果

4.1 異文化対応力測定尺度による質問紙による結果

データを得て、因子分析を行い、下記の5因子が抽出された。【 】内は各因子名であり、その右側は内容についての説明である⁴⁾。

第1因子(F1)【交流】相手国の人々との交流・意思疎通への関心

第2因子(F2)【自国】自国の習慣に関する知識

第3因子(F3)【理知】出来事の理知的理解

第4因子(F4)【スキル】意志疎通方法への関心

第5因子(F5)【相手国】相手国の慣習・自国との関係についての知識

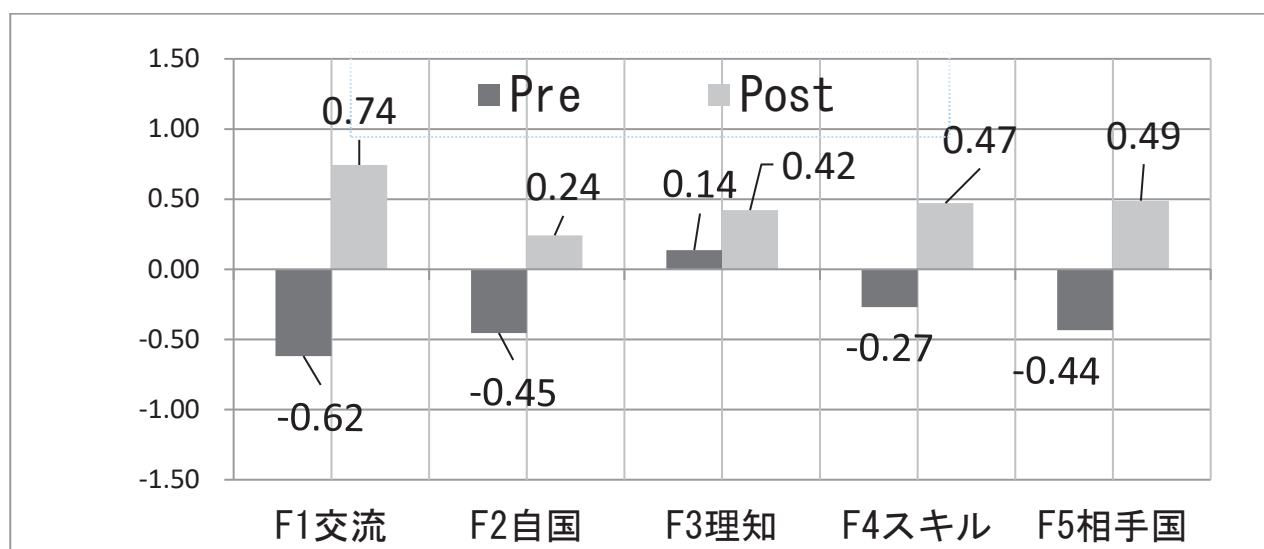


図1 各因子の因子得点平均値 (N=25)

プログラム前後における因子別の因子得点に関する参加生の平均値の変化を示したものが図1である。数値は因子得点を示す。その前後における因子得点に関して差があるかを検証するため、対応のある1要因分散分析を行なった。その結果、第1因子「交流」、第2因子「自国」、第4因子「スキル」、および第5因子「相手国」においてプログラム前後の因子得点に関して統計的に有意な差が認められ、平均値が上昇した(第1因子: $F(1,24)=49.98, p<.001$ 、第2因子: $F(1,24)=14.37, p<.01$ 、第4因子: $F(1,24)=7.59, p<.05$ 、第5因子: $F(1,24)=13.18, p<.01$)。他方、第3因子「理知」においては統計的に有意な差は認められなかった($F(1,24)=2.08, p=.162$)。

4.2 学生の感想アンケート調査

ここでは、5件法にて回答を得た5項目の調査結果(「研修全体」、「ホームステイ」、「学校での授業」、「出発前オリエンテーション」、「自身の成果」)について説明する。25名の参加生のうち、20名から回答を得た。学生が本短期海外留学プログラムの内容に対して感じた満足感は、本稿の主な目的である「異文化対応力が発達したかどうか」に大きく関与していると考えため、この調査5項目の結果について述べる。

各質問項目に関する記述式回答内容に関しては、因子得点がプログラム前後に変化した因子とプログラム内容との関連性を説明する際に、必要に応じて参照することとする。

図5の出発前オリエンテーション以外の調査結果(図2, 3, 4, 6)が示すように、「満足」と「まあまあ満足」を合計した回答率は90%以上で、参加生のプログラム内容についての満足度は高かった。「やや不満」が10%で、「普通」と回答した参加生が15%であった。出発前オリエンテーションについての記述文には、「意欲が湧いた」や「詳細までしっかり説明してくれた」という肯定的なものもあったが、以下のような要望もあった。

- ・出発前からもっとみんなと仲良くなりたかったなと思ったので、オリエンテーションでもう少し(参加生間の)交流の時間があればいいと思う。
- ・英語の授業を取り入れてほしい。

現地では、英語でのプレゼンテーションや学生へインタビューするなどの活動が予定されていたため、英語力に自信のない学生にとっては、事前にもっと練習しておきたかったと思われる。

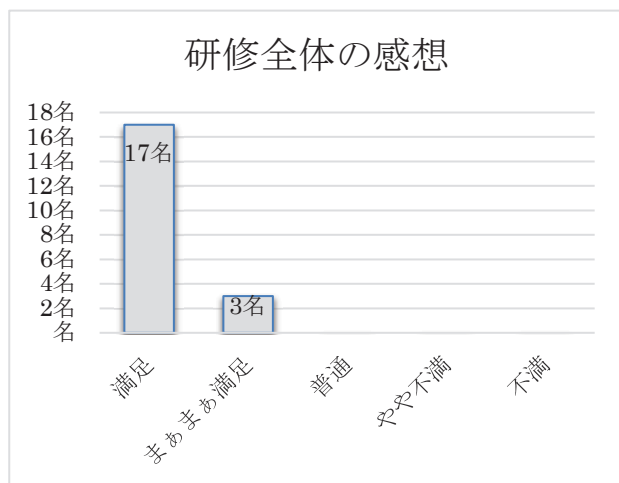


図2 研修全体について (N=20)

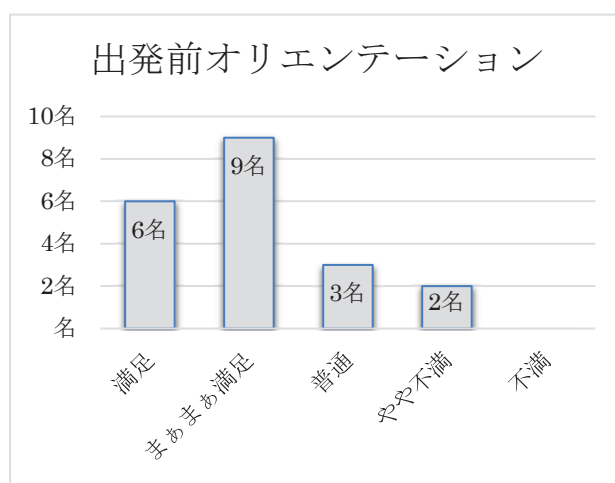


図5 出発前オリエンテーションについて (N=20)

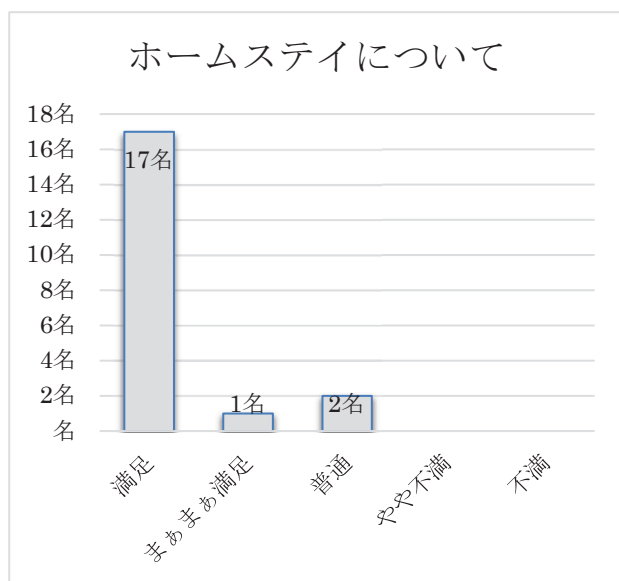


図3 ホームステイについて (N=20)

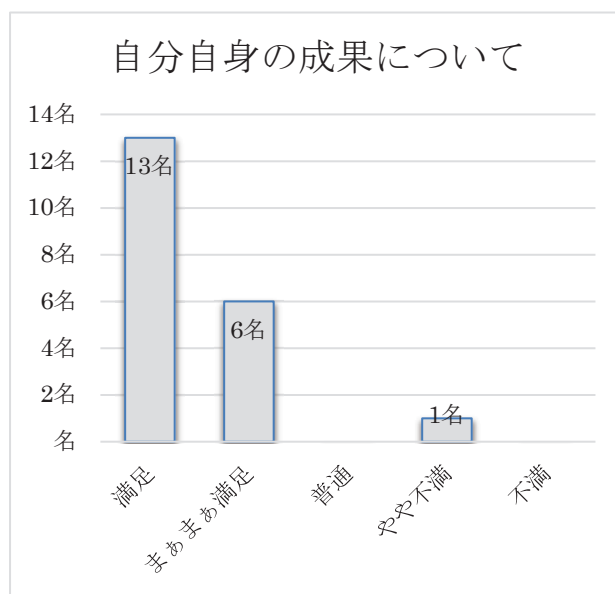


図6 自分自身の成果について (N=20)

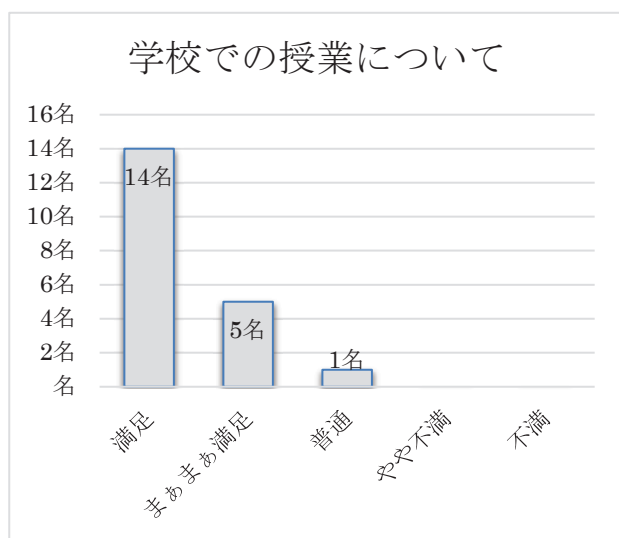


図4 学校での授業について (N=20)

5 考察

研究目的1「本留学参加生の異文化対応力をプログラム参加前と後に測定し、比較する」については、次の結果となった。留学プログラム前後に有意差が認められ、参加生全体の因子得点の平均が上昇した因子は、第1因子「交流」、第2因子「自国」、第4因子「スキル」、及び第5因子「相手国」であった。第3因子「理知」については、前後に差が認められなかった。

この結果を受けて本章においては、研究目的2「変化がある場合、またはない場合にもその理由を探り、プログラム内容と関連づけ、今後のプログラムへの展望について考察する」に焦点をあてる。

ここでは、留学プログラム前後に有意差が認められ、グループ全体の因子得点の平均が上昇した4つの因子、

第1、第2、第4、第5の各因子に留学プログラム内容との関連づけを行い、因子得点が上昇した誘因について考察する。その後、前後に差が認められなかった第3因子「理知」について、その原因を考察する。

5.1 第1因子「交流」（相手国の人々との交流・意思疎通への関心）

本因子内の質問項目の一部を以下に示す。

- ・留学した国出身の人と交流したことがありますか？
- ・SNS やメール等で時々連絡を取り合う外国人の友人はいますか？
- ・日本（自国）と対話相手の人の出身国との間の、過去から現在までの関係について調べたことがありますか？

本因子についてプログラム前後で因子得点平均が有意に上昇した誘因としては、次のことが想定できる。

- 1) 英語授業、ホームステイ、Nihongo Table などの活動での交流を経験した後、留学プログラム後も交流できる外国人の友人ができた。
- 2) 多様な文化出身の人との交流ができたため、アメリカ出身者だけでなく、プログラムと一緒に授業を受けた留学生の出身国にも興味を持ち調べるきっかけを得た。

5.2 第2因子「自国」（自国の習慣に関する知識）

本因子内の質問項目の一部を以下に示す。

- ・日本（自国）で生活する際に、自分達の生活に大きな影響を与える社会のルールはどのようなものかについて知っていますか？
- ・（上記質問で「少し知っている、ある程度知っている、詳しく知っている」のどれかを回答した人のみ）そのルールは日本人（自国の人々）にどのように受け取られているのかについて知っていますか？
- ・日本（自国）で人々がどのように一般常識や習慣を身につけていくのかについて知っていますか？

本因子についてプログラム前後で因子得点平均が有意に上昇した誘因としては、次のことが想定できる。

- 1) 学生の感想アンケート調査項目に「留学中にアメ

リカと日本の文化や習慣の違いに気づきましたか」という質問があった。このアンケートには20名の参加生が回答したが、この質問に対して20名全員が「気づいた」と回答し、具体的に気づいたことについて言及した。現地で実際に見たアメリカの大学や家庭、コミュニティでの習慣が自分の習慣と違うことに気づき、日本の習慣と比較したことにより、これまでに無意識に行なっていた日本の習慣に気づいたことが本調査結果によりわかった。現地の人々との接触が多くあったことが誘因と想定できる。

2) 前述したNihongo Tableというサークルに参加しているデラウェア大学の学生は日本語・日本文化に興味を持っている。長崎大学の学生も本サークル活動に毎週参加し、そこでは日本文化について語り合ったため、より日本の文化や習慣に焦点が高まった。

5.3 第4因子「スキル」（意志疎通方法への関心）

本因子内の質問項目の一部を以下に示す。

- ・日本人（自国の人々）と外国人が含まれるグループでディスカッションをしたことがありますか？（授業内、授業外どちらでも）。
- ・（上記質問で「一度ある」「数回ある」「頻繁にある」のどれかを回答した人のみ）その時に、自分が持っている知識やスキルを使って、結論がでるように導くことができましたか？
- ・外国人とのディスカッションで、文化の違いを配慮して、参加者全員が納得できるような結論を導くことができましたか？

本因子についてプログラム前後で因子得点平均が有意に上昇した誘因としては、次のことが想定できる。

- 1) 本プログラム参加生全員ではないが、レベルの高いクラスの英語授業を受講していた参加生のみ、デラウェア大学の「日本史」の授業に参加し、その授業では日本の史実についてのディスカッションが行なわれた。
- 2) 日本文化についてのグループプレゼンテーションを現地で全員が行った。これはポスターセッションと同様のスタイルで行なったため、同時に7グループ全てが自分達のテーブルで英語によるプレゼンテーションを行い、オーディエンスであるデラウェア大学の学

生は、各グループのプレゼンテーションを順次見て周り、インフォーマルな雰囲気でのディスカッションを行った。「各グループはオーディエンスが順次入れ替わるため、何度も同じプレゼンテーションを繰り返すことにより、徐々に緊張がほぐれて最後には言いたいことが表現できるようになった」、という感想を長崎大学参加生より得た。同じ内容を何度も繰り返して説明することは、忍耐を要する活動だったと思われるが、このプレゼンテーションスタイルによって、英語を使って表現し、他者からの質問に答えることに慣れていったと想定できる。

5.4 第5因子「相手国」（相手国の慣習・自国との関係についての知識）

本因子内の質問項目の一部を以下に示す。

- ・留学（訪問）した国・地域で生活する際に、自分達の生活に大きな影響を与える社会のルールはどのようなものかについて知っていますか？
- ・（上記質問で「少し知っている、ある程度知っている、詳しく知っている」のどれかを回答した人のみ）そのルールはその国の国民にどのように受け取られているのかについて知っていますか？

本因子についてプログラム前後で因子得点平均が有意に上昇した誘因としては、次のことが想定できる。

1) 5.2 で述べた、学生の感想アンケート内の質問項目「留学中にアメリカと日本の文化や習慣の違いに気づきましたか」に対して回答者 20 名全員が「気づいた」と回答し、下記のようなコメントを得た。

・授業でも感じましたが、大学内でも日本に比べて個人行動の人が多く、個人の考えを重視している場面に何度も遭遇し日本と違うと感じました。

・特に印象に残っているのは、宗教を重んじることや、ルールが少なく自由なことです。

・自分の意見をきちんと言うし、相手の意見も尊重する文化だなと感じました。またすごく自国を誇りに思っていて、だけど私たちのような他国民も受け入れてくれる。

以上のようなコメントを得た。これらの感想から、彼らが接したアメリカの人々にとっては個人主義が行動の基本であることに多くの参加生が気づいたことが

わかる。

2) これらの気づきは、ホームステイや現地の学生との交流によって生じたと考えられる。

5.5 前後で変化がなかった第3因子「理知」（出来事の理知的理解）について

本因子内の質問項目の一部を以下に示す。

- ・日本（自国）で起こったニュースを見て、その出来事はどのような原因で起こったのか、考えたことがありますか？
- ・（前文の）その出来事について、根拠に基づき論理的に分析・評価したことがありますか？
- ・留学（訪問）した国・地域や海外で起こったニュースを見て、その出来事はどのような原因で起こったのか考えたことがありますか？
- ・（前文の）その出来事について、根拠に基づき論理的に分析・評価したことがありますか？

本因子についてプログラム前後で有意差が認められなかった理由としては、次のことが想定できる。

1) 本因子得点について、各参加生個人の得点をプログラム前後で比較してみた。Pre と Post のどちらでも低い、またはどちらも高い、増加または減少の変化がごく僅かであった参加生を合計すると、25 人中 13 名（約 52%）であった。一方、プログラム後に得点が下がった参加生が 4 名、上昇した参加生が 8 名という結果であった。これらの状況を総じて平均を出すと、有意な変化は出なかったが、一部の参加生には変化があったことがうかがえる。

2) 上記の結果から判断すると本因子「理知」（出来事の理知的理解）については 3 週間の留学では変化が起きにくい因子だと考えられるが、1) で述べたように上昇した参加生が 8 名いたため、一部の参加生には変化が起きることはわかった。しかしながら、上昇の変化が起きた参加生全員の英語力が高いわけではないことも、彼らのプレイスメントテストの結果により明らかになった。よって、この因子に関連する competence は発達しにくいと考えられる一方で、英語力がそれほど高くなくとも発達することが可能だと推測できる。

6 まとめと今後の課題

本稿における異文化対応力測定方法では、1章で述べたように、八島(2004)⁴⁾による異文化対応力の定義「異文化接触でおこりうる対人関係の違和感や齟齬を調整し、異文化の人との出会いを両者にとって実りのあるものにする能力、未知の環境で自己制御しうまく機能できる個人の能力」を採用した。この定義を能力別に記述する。

- 1) 異文化接触でおこりうる対人関係の違和感や齟齬を調整する能力
- 2) 異文化の人との出会いを両者にとって実りのあるものにする能力
- 3) 未知の環境で自己制御しうまく機能できる個人の能力

このように異文化対応力を分割した場合、1)の能力には、第1因子「交流」(相手国の人々との交流・意思疎通への関心)、第2因子「自国」(自国の習慣に関する知識)、第5因子「相手国」(相手国の慣習・自国との関係についての知識)が関連していると考え。異文化接触での対人関係で発生する違和感や齟齬を調整するには、自国と相手国についての知識が豊富になり、それらの知識を用いて、交流し意思疎通を行おうとする意志があつてこそ、これらの問題を調整できるであろう。

2)の能力には、第1因子「交流」(相手国の人々との交流・意思疎通への関心)、第4因子「スキル」(意志疎通方法への関心)が関連していると考え。異文化の人との出会いを両者にとって実りのあるものにするためには、交流・意思疎通を行いたいという関心があり、それを実現するための方法についての関心とそのスキルが必要である。

3)の能力には、第3因子「理知」(出来事の理知的理解)に含まれている、物事を論理的に分析評価する能力が関連していると考え。困難な状況の中にあつても論理的に出来事を分析評価することにより、自己制御し、ある困難な状況下においてうまく機能できるようになると予測する。

以上のように、本稿にて論じてきた異文化対応力測定方法によって得たデータを分析した結果、出現した5つの因子と定義された異文化対応力のそれぞれの能力は、意味的に関連しているといえるだろう。よって、これらの各因子に基づいて海外派遣前後、または派遣

前事前研修前と派遣後に本異文化対応力測定方法を使用して、それぞれの事業成果を測定することは可能であると考え。

長崎大学では短期海外留学の成果を判断するために、従来は学生の感想アンケート調査のみを実施していた。しかしながら、4.2の調査結果が示すように、学生の満足度が高いことは本調査結果にてわかるが、その結果として、学生のどのような competence に影響を与えたか、という教育にとって重要な視点を充足することはできなかった。

今回、異文化対応力測定尺度を策定し、それによって得た統計結果と学生の感想を併用して分析した結果、今回調査対象とした2018年度に長崎大学にて実施した短期語学留学のプログラム内容は異文化対応力の一部の能力を発達させることに有効であったと結論づけることができる。しかしながら、本短期留学プログラムに参加する各学生の出身学部や英語力、特性、参加動機の種類などは、実施する年度により異なる可能性があるため、毎回同様に成果を上げることができる、という確証を得ることは難しい。

プログラム前後で因子得点平均値に変化がなかった第3因子「理知」(出来事の理知的理解)に関しては、3週間のプログラムでは、期間が不足していると考えられる。少なくとも1学期程度の期間を通して、異文化理解や異文化間コミュニケーションなど、何らかの授業内で思考・分析を実践することによって、本因子に関わる能力を発達させることが可能となるであろう。現在、国内外を問わず、様々な事件や問題が発生しているが、メディアが発信する情報のみを受動的に無意識に受け取るのではなく、自らが調査し、客観的に物事を分析する力を身につけることは、今後何らかの問題に直面した際に、それらを解決する方法を探るための、基本的で、且つ重要な能力習得へと繋がるであろう。

本プログラム参加生の多くは英語力をつけたいという強い動機を持って参加したが、現地に到着した最初の時期は、ホームステイ先でもなかなか英語を話せない、と悩んでいた参加生もあり、行動の積極性には各人によって差があつた。参加生が自発的に積極的な行動をとって、英語力と異文化対応力を発達させることが望ましいと考えられるが、実際には各人の特性や能力には個人差がある。しかしながら本プログラムは教

育の一環として学生が参加するため、積極的な行動が苦手な学生であっても、ある一定の成果を身につけてほしいと考えた。そのためいくつかの必修の課題を設定し、それらを達成するよう努力することを求めた。その結果として、本調査紙による結果では5つの因子のうち4つの因子で因子得点平均点が上昇したのかもしれない。学生の感想アンケート調査の内容によると、参加生のホームステイ先がそれぞれ違っており、また授業を受講するクラスも異なることから、参加生はそれぞれ様々な経験をしたことがわかり、各人が多様な経験をしたこともその一因と考えられる。

本質問紙の質問項目内容は、被験者が実際に行った行動を根拠に自分で評定し、できるだけ客観的な事実をとらえるように項目を設定した。しかしながら、自己評定であるため、正確に客観的な事実を捉えているとはいえないことから、本質問紙で明らかにできることには限界があるといえよう。今後ピア評定や引率教員や授業担当教員、またホームステイ先のホストファミリーからの意見など他の評定も入れることができるようになれば、個々の学生の成長をより客観的にとらえることができるようになるであろう。

本調査の後、質問項目について著者らは議論を行なった。質問紙には回答が難しいようにみえる質問項目もあるため、いくつかの項目を削除した方がよいという意見があった。一方で参加生の心理についてももう少し測定する項目もあった方がよいのではないかと、との意見もでた。議論の結果、工藤 (2013)¹¹⁾が作成したコミュニケーション能力測定予備調査で使用された、「自尊感情尺度」、「自己肯定意識尺度」、「達成動機測定尺度」、「シャイネス尺度」の心理特性尺度のいくつかを現調査紙に追加することを決定した。この追加によって、より多面的に異文化対応力が測定できるようになると想定している。既に質問項目の一部を変更し、新たな2019年度版質問紙が2019年1月に完成した。

今後はこの2019年版質問紙を使用してさらにデータを収集し、分析を繰り返して信頼度を高める質問紙へと改訂していく予定である。

注

- [1] Byram の Intercultural Communicative Competence モデルにもとづく質問紙を開発した経緯については、古村 (2018)⁸⁾を参照されたい。

- [2] 本研究では語学留学前後の変化の測度として因子得点を用いた。それは、各参加生の回答を標準化し因子得点係数を掛けて因子毎に算出するものであり、抽出した5因子に関わる全27項目すべてから算出するものである。

なお、5因子を各下位尺度と見て、そこに分類される5つの質問項目群に関してクロンバックの α 係数(信頼性係数)を算出した。その結果、第1因子から第5因子を構成する各質問項目群におけるものは、それぞれ、0.93、0.82、0.83、0.86、0.90となった。このように各質問項目群における回答の内部一貫性は全て.80以上であった。

- [3] 本論の結果で論じる数値は工藤氏の分析により算出され、図表もこれらの数値に基づく。
[4] 因子分析の経過と詳しい説明については工藤・青柳 (2019)⁵⁾を参照されたい。
[5] 各因子の全質問項目内容については、工藤・青柳 (2019)⁵⁾の付表1を参照されたい。

引用・参考文献

- 1) グローバル人材育成推進会議. (2011). グローバル人材育成に関する諸課題について: <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/kanjikai/index.html> (2020年1月2日参照)
- 2) 勝又美智雄. (2017). 最強の英語学習法. IBC パブリッシング.
- 3) 八代京子, 町恵理子, 小池浩子, 吉田友子. (2009). 異文化トレーニング 改訂版: ボーダレス社会を生きる. 三修社.
- 4) 八島智子. (2004). 外国語コミュニケーションの情意と動機: 研究と教育の視点. 関西大学出版部.
- 5) 工藤俊郎, 青柳達也. (2019). 異文化対応力測定尺度作成の試み. グローバル人材育成教育研究, 7(1), 30-35.
- 6) Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Multilingual Matters.
- 7) Byram, M. (2008). *From foreign language education to education for intercultural citizenship: Essays and reflections*. Multilingual Matters.
- 8) 古村由美子. (2018). 異文化対応力育成研究部会の発足から現在までの活動について(グローバル人材育成教育の挑戦—大学・高校での実践ハンドブック pp. 376-385). IBC パブリッシング.
- 9) 黒崎真由美. (2013). 海外留学の意義と効果—短期海外研修&三か月留学. 留学交流, 29, 1-7.
- 10) 大津里香, 佐竹正夫. (2016). 短期海外語学研修はどれほどの効果があるのか—常盤大学の場合. 留学交流, 65, 16-24.
- 11) 工藤俊郎. (2013). 大学生に有用なコミュニケーション能力の測定研究(質問紙調査分析から得た尺度の有効性の検討). リメディアル教育研究, 8(1), 147-161.

受付日 2020年1月8日、受理日 2020年7月18日